会報

法人設立40周年記念特別号

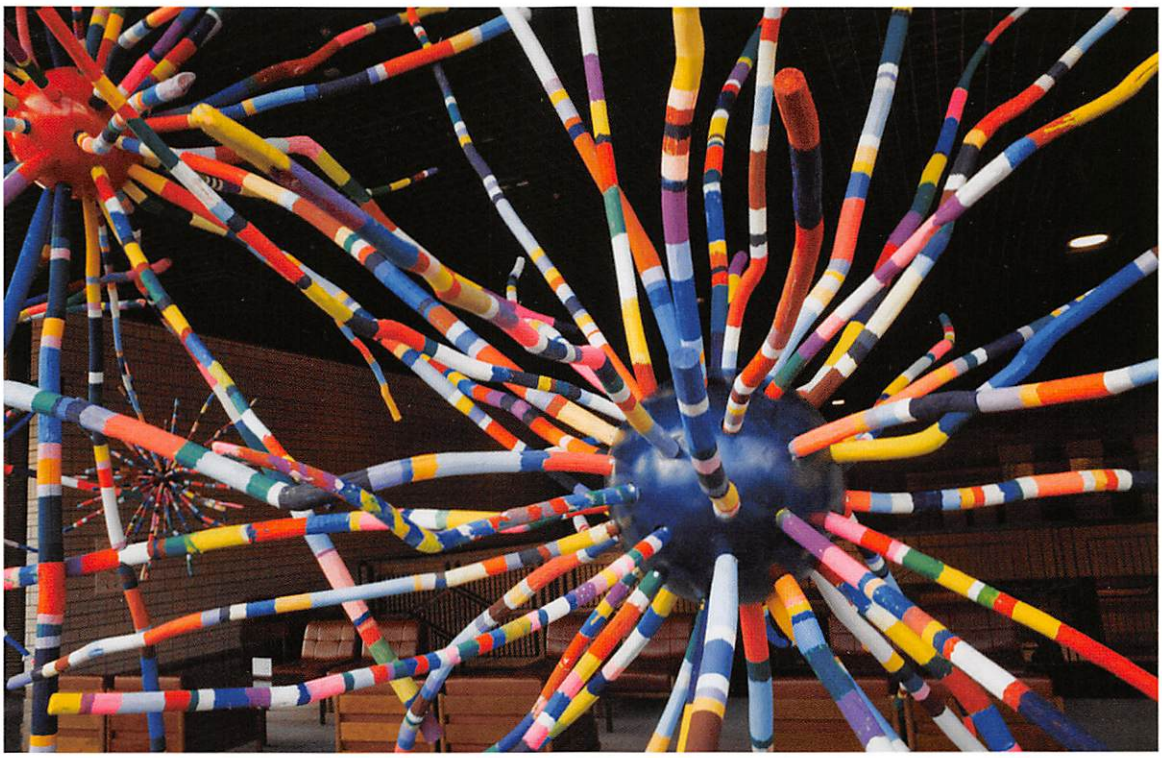
平成30年1月

アルテピア

一般社団法人 北海道美術館協力会

札幌市中央区北3条西18丁目2－7 新田ビル2F　TEL・FAX 011－644－4025

http://www.artepia.or.jp



流木アート《色とりどりの夢　キンビでばくはつ!!》

ダム・ダン・ライ氏と親子53名による合作（部分）　高さ4.5m×幅6.7m×奥行3.0m　11月4日　親子アートクラブで制作

笑顔で指導するダム・ダン・ライ氏

ダム・ダン・ライ[Dam Dang Lai]

彫刻家。1973年ベトナム生まれ。
ベトナム国立フエ芸術大学で絵画と彫刻を学ぶ。2002年来日、札幌市に拠点を構える。2007年には小樽市の古い民家を自ら改修、工房とギャラリーとする。札幌を中心に作品の発表をしているが、愛媛、宮崎、東京など日本各地、海外でもベトナム、韓国、中国と広く活躍し、高い評価を受けている。
2016年、北広島市の黒い森美術館での個展、2014年の札幌芸術の森美術館での野外彫刻展などが記憶に新しい。また、小樽チームとして雪像彫刻展にも参加、名寄市や、カナダのコンクールで入選・入賞している。

真剣なまなざしで取り組む親子

50周年に向け、更なる活動の充実を

一般社団法人　北海道美術館協力会　会長
吉野　次郎

一般社団法人北海道美術館協力会（愛称アルテピア）は、今年で創立40周年という大きな節目を迎えました。先ずは、この40周年を会員一同で喜びたいと思います。

１９７７年（昭和52年）の当会創立以来40年という長い年月、世の中は色々な出来事があり、波乱に満ちた時代であったと言えます。その間、私達アルテピアは諸先輩の思いを引継ぎながら、一貫して北海道に於ける美術の振興、発展に努めてまいりました。

当会が今日あるのは、美術を愛する多くの会員の皆様方のご支援、又常に当会の目的である北海道の美術文化の振興発展に取り組んできた２００名に及ぶボランティア活動員の努力の賜物であるといえます。

今年の40周年にあたり、昨年より準備を進め、財政基盤確立に向けての活動、そして11月の感謝ウィークでは、「近美と協力会の40年」「図録のみの市」「池澤夏樹氏による記念講演会」「親子で作る流木アート」「記念コンサート」等、盛りだくさんの活動を全員一丸となって行いました。

この事業により、40年に亘る道民の皆様のご支援への感謝の気持ち並びに、この40年を礎に更に一層の飛躍を誓う、私達の気概を十分に発信できたものと考えます。

この一連の取り組みは素晴らしい内容であり、これからの活動を行うにあたり、貴重な行動力、協調性、そして自信を私達は得ることができたと思っております。

さて、今後の私達を取り巻く情勢は、先行きが見えない、不安定な状況が続くものと思われます。そういう時こそ人々に心の安らぎをもたらす美術文化は益々重要なものとなっております。その振興発展の役割を担う当会の役割と、又、当会に寄せる道民の期待も非常に大きいものであります。これまでの歴史を礎に、会員一同が、10年後の50周年に向け情熱をもって、活動の充実を目指していきたいと思います。

最後に、この40周年記念行事に格別なご支援、ご協力を賜りました嵐田館長様はじめ北海道立近代美術館の皆様に心から感謝を申し上げ、ならびに、本会報「アルテピア特別号」の編集に携われた広報部の方々のご労苦に感謝を申し上げます。

法人設立40年のあゆみ

昭和52年（1977）
- 4月北海道美術館協力会設立（以下「協力会」）
- 7月北海道立近代美術館開館（以下「近美」）

昭和53年（1978）
- 売店部活動開始
- 9月近美に解説ボランティア「求美会」設立・活動開始

昭和54年（1979）
- 10月事務局を近美内に開設
- 第1回海外美術研修旅行実施（以降34回実施）

昭和57年（1982）
- 8月協力会が社団法人となる
- 12月駐車場管理事業開始
- 「ボランティア活動5年間のあゆみI」発行（以降5年ごとに1回発行）

昭和60年（1985）
- 8月解説部門が三岸好太郎美術館で解説開始

昭和61年（1986）
- 12月法人設立10周年記念として「名画を贈る道民の会」結成

昭和63年（1988）
- 9月マリー・ローランサンの作品2点道に寄贈、後に近美に移譲

平成2年（1990）
- 資料部門活動開始
- 4月ARS（アート・リファレンス・サービス）コーナー運用開始

平成4年（1992）
- 10月ボランティア養成研修開講

平成6年（1994）
- 4月事務局組織にボランティアが編入され7部体制となる（事業・広報・売店・解説・資料・研修・特別活動）
- 7月ボランティア活動員向け情報誌が「あんてな」となる
- 10月北海道美術館ボランティア交流会が札幌で開催（以降　平成11年、平成23年にも札幌で開催）

平成7年（1995）
- 9月ジュニア・アートクラブ事業開始

平成8年（1996）
- 4月協力会の愛称が「アルテピア」に決る

平成9年
- 10月法人設立20周年を記念して

設立40周年にあたって

北海道立近代美術館　館長
嵐田　昇

北海道美術館協力会は、当館の開館とともに1977年に設立され、同時にボランティア活動が開始されましたことから、当館との連携・協力関係も本年で40年という節目を迎えたことになります。

北海道美術館協力会には、当館の開館以来長きにわたり広報や売店、美術作品の解説などのボランティア活動はもとより、貴重な絵画の寄贈や冊子刊行への協力など様々な形でご支援をいただき、当館の運営の陰日向となり支えていただいておりますことに心から感謝申し上げますとともに、これまでの美術に関する様々な事業をとおして道民の知識教養の向上に尽力され、また、本道の美術文化振興発展に貢献されてきました活動に対しまして、深く敬意を表します。

北海道美術館協力会の設立当初の記録を見ますと、ボランティア活動は、売店部と解説部のわずか15名でスタートしたとあり、それが40年を経た今日、売店部、解説部に加え、事業部、広報部、資料部、研修部、特別活動部の計7部となり、約170名の方が在籍する大きな組織になっております。

これ程の大きな組織が40年もの長きにわたって活動を続けてこられたのは、吉野会長をはじめとする役員の方々のリーダーシップはもとより、やはりボランティアの皆さま方の当館に対する活動へのご理解や、ご自身の自発的な奉仕活動の精神が、設立当初の会員の方々から現在の会員の方々へ代々と受け継がれてきたことに尽きると思います。

美術館を取巻く環境は、依然として厳しい状況にありますが、本道における美術文化の拠点としての役割を果たしていくことや多くの道民の方々に愛され、身近に芸術文化を親しむことができる、地域に開かれた美術館づくりになお一層努力してまいります。

これからも北海道美術館協力会と当館が、それぞれの目的を達成するためには、これまでの積み重ねてきた40年間の連携・協力関係をさらに強固なものにしていくことが、最も重要なことと考えております。

来年は、北海道と命名されてから150年の年。そして、さらにその先に向かって、これまで同様、お互い手を携えて進んで行けますよう、北海道美術館協力会及び会員の皆さんのさらなる発展を心から祈念申し上げます。

（1997）学生美術全道展の最高賞に協力
会賞を贈呈（以降　毎年贈呈）
平成10年（1998）・2月近美前庭で「みんなで作ろう雪だるま」実施
平成11年（1999）・8月「会報」を「アルテピア」として発行開始
平成13年（2001）・1月近美1階にボランティア活動「PRコーナー」新設
平成17年（2005）・4月解説部が三岸美術館で土日の団体ツアーを開始
平成21年（2009）・4月美術講座が道民カレッジの連携講座となる
・10月法人設立30周年記念式典を開催。記念事業として子ども美術館招待事業開始（以降毎年実施）
・6月近美と知事公館の野外彫刻清掃開始（以降毎年2回実施）
平成22年（2010）・10月法人設立30周年記念としてモディリアーニの素描「フジタの肖像」と松島正幸の「新緑の札幌」を寄贈
平成23年（2011）・4月東日本大震災チャリティバザー開催
・7月「コレクションへの招待　北海道立近代美術館名品100」を発行
平成24年（2012）・8月藤田嗣治作「家族の肖像」を近美に寄贈
平成25年（2013）・4月協力会が一般社団法人となる
平成26年（2014）・4月東西売店を一か所に統合してリニューアルオープン
・12月「美術への誘い」中央図書館との共催事業になる
平成27年（2015）・10月中・上級者向け美術講座「美術講座プレミアム」開講
・2月40周年記念特別委員会を設置
平成28年（2016）・11月会員募集特別キャンペーン開始
平成29年（2017）・3月北3条西18丁目のビルに事務所移転
・11月法人設立40周年記念事業が行われる

感謝ウィーク特別展「近美と協力会の40年」

40年に想いを馳せて

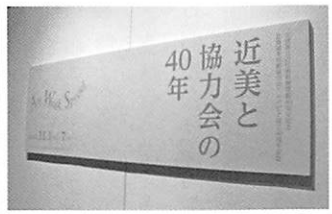
松山（まつやま） 聖央（まお）（北海道立近代美術館 展示・作品課 学芸員）

近美と協力会の40年を、芸術週間という7日間でいかに見せるのか―この展覧会を担当することになったとき、正直なところ、ちょっと頭を抱えました。直前の「ゴッホ展」のように、国際的な規模で作品や人が動くような展覧会ではないかもしれません。お金をかけて会場を造り込み、たくさんの作品を並べる展覧会ではないかもしれません。ただ、そうしたある種の「派手さ」によるごまかしがきかない分（いや、大きな展覧会がけっして何かをごまかしているわけではありませんが）、難しいなぁと感じたのです。

そこであらためて、「近美と協力会の40年」という一見明白な展覧会タイトルの意味に立ち戻ってみました。「近美」も「協力会」も、それぞれひとつの組織であり、一般の利用者にとっては、「近美」は美術館という施設・建物でもあります。その意味では、ふたつの組織が手がけ、近美という場所を中心に生じた出来事を振り返ることで、40年という歴史が見えてくるのかもしれません。でも、公式な記録として書き留められた情報だけではとりこぼしてしまうものが、40年という時間の蓄積のなかにはあるのではないか。展覧会ひとつとっても、企画した学芸員や実現までに尽力した職員や外部の協力者がいて、運営に携わったスタッフやボランティアの方がいて、さまざまな思いで展覧会に足を運んだ観覧者がいたということを、少しでも展示に反映できないか。

そのような考えから、私は今回「近美と協力会の40年」を単なる事項の羅列としてではなく、「ひと」の活動の集積として理解することにしました。いつもは美術史的に位置づける作品を、協力会の寄贈活動という観点からとらえ直してみたり、ボランティアの方々の協力を得て、過去のさまざまな活動の写真や思い出の品を年表に取り入れたりする作業は、私にとっても楽しく勉強になる機会でした。

今回の展覧会をつうじて、これまでの40年を振り返ったことが、今度はこれからの近美と協力会を展望することへとつながっていけば幸いです。



特別展の入口

寄贈作品
マリー・ローランサン
《三人の娘》1988年

法人設立40周年記念行事

近美とこの道コンサート

感謝ウィーク5日目の催しは天候に恵まれ、1階に用意された椅子が足りなくなり、2階にも席が設けられました。

COTOHA（コトハ）はソプラノ歌手の早坂圭子さんとピアノ奏者の関葉月さんのクラッシックユニットです。二人はともに札幌出身。

高校、大学の同級生でしたが卒業後別々の国に留学しました。数年後、ドイツのコンクールで偶然の再会を果たし、これを機にユニットを結成しました。

プログラムにはクラシックからポピュラー、歌謡曲、唱歌など、親しみのある曲が準備されていました。澄んで響き渡るソプラノの歌声と感情のこもったピアノ演奏のコラボは晩秋の西日がさしこむ会場で耳を傾けていた約260人を魅惑の世界へと誘ってくれました。

盛況！ 図録のみの市

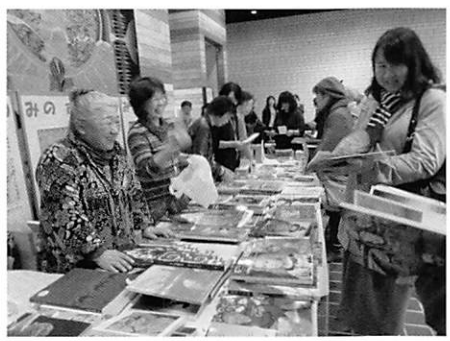
近美1階のロビーで行われた「図録のみの市」は、初日の3日から大勢の人で賑わいました。

開店の10時には、商品の図録や、絵葉書などが台の上に整然と並べられ、約10名のボランティアがお客さまを迎えました。

商品の図録は、ボランティアを始め、協力会の理事・監事にも呼びかけて集められました。集まったのは、図録が約350冊、絵葉書とグリーティング・カードが約1600点でした。

期間中3日間の売り上げは14万3千900円。これらはすべて協力会の活動に充てられます。

これに合わせて、1階ロビーでは「感謝ウィーク限定入会キャンペーン」も行われました。期間中の入会者は13名でした。



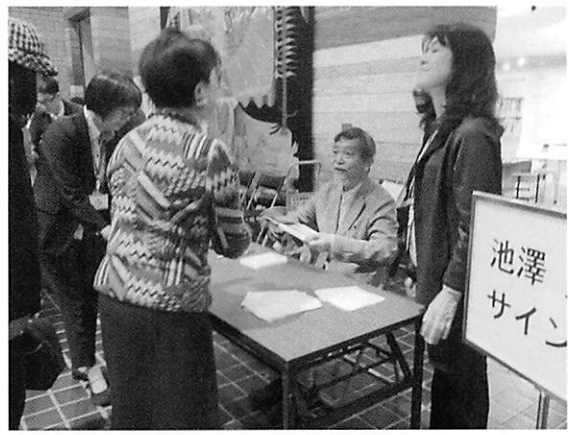
法人設立40周年記念事業

池澤夏樹講演会

作家池澤夏樹氏による「古代の美術と現代の美術　ミュージアムから始まる旅」と題する講演は、11月3日午後1時30分から近美講堂で開かれ、約180人の方々が熱心に講演を聴きました。

講演は古代美術など17枚の映像を使い、古代から現代までの美術について、軽妙な語り口で90分を一気に語り、観衆を魅了しました。（講演の抄録を6ページに掲載しています）

講演の後にはサイン会が行われ、多くの方々がサイン本を片手に作者と握手するなど、盛会裡に講演会を終えました。



感動の美術館巡り

40周年記念事業の一環として今年は、政情不安で実行出来ない海外研修を断念し、国内を2度行う事とした。　春の秋田・青森は、美術・博物館等を15ヶ所、一寸ハードかとも思われたがリピーターの多いこの旅行、参加される方も、力の入れ方を会得している感があり安心していられる。実は新幹線を使っての案を当初の企画に入れていたが、諸事情により札幌開通迄のお預けとなった。近い様で遠い東北。三内丸山遺跡をはじめ土蔵のアトリエ美術館、武家屋敷、弘前城そして、竿燈やねぶたの素晴しさに、郷土に根ざした文化に感動。秋に計画の九州においては、敢て自然災害に苦しんでいる地を選び、その現実に触れ、応援したい気持より「がんばれ」との呼び掛けの旅となる。修復中の熊本城、水害の爪痕残る福岡・大分。そして14もの臼杵石仏を含めた美術・博物館。企画の段階での未知なる不安も現地にて受けた感動に旅の真髄を感じる。だからこの旅行は継続できるのかも。

（事業部　木村壽賀子）

安本亀八《相撲生人形》1890年
11月5日　熊本市現代美術館で

親子アートクラブ

色とりどりの夢　キンビでばくはつ!!

～親子で作る流木アート～

11月4日(土)　10時00分～12時30分

講師　彫刻家　ダム・ダン・ライ氏

トロピカルな南国の深海に生息する奇妙な生物をも連想させる作品。会場脇に置かれた完成模型作品である。開会式で講師のダム・ダン・ライさんは「北海道の木々は厳しい風雪に耐えながら変化に富んだ形状を作り出す」「その特徴を生かしながら四季の豊かな色彩を施して欲しい」と。

会場の近美2階造形室には53名の親子が参加し、1mあまりある枝への彩色に取り組んだ。悪戦苦闘しながらも親子で協力しあい、その流木はみるみる美しい作品に生まれ変わった。

参加した、あやかさん親子は「流木が好きで初めて参加しました、楽しかったです。」2年生のまさなお君、3年生のゆみさんも「色塗りが楽しかった。」「パレットの上で色々な色を作るのが面白かった。」とはにかみながら話してくれた。あるお母さんも「普段は子どもとこのような活動はなかなかできないので貴重な体験でした。」とも。

後半は子どもたちとすっかりうちとけたダム・ダン・ライさんは「これをきっかけに色彩に対する関心がさらに深まれば嬉しいです」と笑顔で語っていた。

「美術館とともにⅧ」刊行にあたって

協力会設立当初から引き継がれてきたボランティア活動の記録誌、通称「あゆみ」も40周年を迎える今年度は8回目の刊行となります。

広報部が中心となり、各部から1～2名の担当者と事務局が入り、10ヵ月近くに及ぶ長丁場でやっと完成のはこびとなりました。

今回も、前回にもまして予算の削減を強いられる中、ページ数の見直しとともに、印刷用原稿の全てを自分たちで作成することにしました。

ある程度統一したフォーマットにすることで、入力作業も円滑に進められるのではないかと考えましたが、ソフトのバージョンの違いや操作の熟練度など、担当者の方々には随分とご苦労をかけてしまったようです。検討する部分も多々ありますが、普段、表に見えない活動の様子など、単なる資料としてだけではない奥深さを、行間に感じとって頂ければと思います。

尚、この資料は道内の美術館や大学、ボランティア団体などにも送られます。

（広報部　田辺恭子）

古代の美術と現代の美術 ミュージアムから始まる旅

詩人・作家　池澤　夏樹

抄録

運慶と北斎の違い

タイトルを「古代と現代」としましたが、むしろ「古代と近代」との美術ですね。

古代と近代の違いは作者の名前が伝わっているか、その生涯が解っているか否かでわかれると思います。

先日、評判の「運慶」展を東京で観てきました。大阪で人気が高い「北斎」の方は行かなかった。運慶の作品は彫刻で、立体感や厚み、筋肉の表現が素晴らしい。

北斎の作品は複製を前提としたグラフィックアートです。

「美術館」、「博物館」といいますがもともと「ミュージアム」という一つの言葉です。これが日本に入って「博物館」と「美術館」に分かれたのは不便ですね。

さて、運慶と北斎の違いは何か。

彫刻とグラフィックアート。運慶は平安から鎌倉時代、北斎は江戸時代に生き、時代も違うが、大きな違いは北斎はその人物が良く知られていることです。掃除をしないで、家の中が散らかると引っ越した。その回数が、生涯で81回とか。一方、運慶についてはその人柄はほとんど伝わっていません。

近代の画家たち

作品を観るときつい作者の人生を重ねてみてしまいます。ゴッホやゴーギャンなど、いかにも悲劇的な人生に見えて小説にもしやすい。人生と作品がセットになっている。それがよいことかどうか。

比較的地味な人生を送った画家にパウル・クレーがいます。彼の絵は色や形が単純化され抽象化されています。タイトルも文学的で、いかにも詩人らしい。心理学的奥行きのある夢の絵は、心理学者のユングに通じるものがあります。

近代の画家は広いマーケットの中でお互いの競争が激しいので、個性を出さなければなりません。作品は一目で作者が分かるよう作風が求められる。

モディリアーニやピカソは一目でわかります。観る者が求めなくても、画家の方から人格や人生を作品にからめて売り込んくる。それに対して古代のものは作品だけを観て評価できる。ぼくにはそれが気持いい。

近代の美術が作者の人生を絡めるようになったのは文学の影響ですね。エミール・ゾラの自然主義文学が日本に入り、自分の人生を包み隠さず書くのが文学という風潮が拡がりました。

これが告白ごっこになって、次第に露悪的にまでになる。その代表的なものとして、島尾敏雄の「死の棘」を挙げておきましょう。ぼくはどうもこういうものが好きでない。自分自身の生活の中に素材を見つけることがあっても、人生そのものを書くことはありません。

古代の美術との出会い

古代の美術の方が力強かった気がします。

十数年前、自分の好きな古代の作品をまとめてみようと考えました。

まずイギリスの大英博物館を起点とする。ここでは、地域ごとに作品が展示されています。それらを丁寧に観てまわり、気に入ったものを写真に撮る。説明のプレートも合わせて撮る。その写真を基に本当に好きなものを選び出して、それらが作られた土地へ行く。これを繰り返して、訪れたのはギリシャ、エジプトなど13カ国です。

なかでもギリシャは3年程暮らした国で、この間はガイドをしていたので遺跡は大体知っていました。

大変だったのはイラク。フセイン政権は外国人の入国を禁止していました。それが解禁になったと聞いて、行きました。開戦の4ヵ月前でした。

国中の遺跡や博物館を巡り、人々と話し、彼らが本当に好きになった。経済封鎖の辛さをしみじみ聞きました。

ぼくはコレクションをしません。蔵書も多くありません。一つの作品を書くのに使った資料は古書店に返します。好きな美術品は世界各地の博物館に預けているつもりでいます。

今、博物館の収蔵品について返還要求が起きています。それは理解できますが、世界中のものがまとめて見られる大英博物館のような施設にも意義がある。

何点か画像をお見せしましょう。

メキシコの石の浮彫、エジプトの船大工の像、運慶の彫刻、クレーの詩的な表現、北斎の大胆な遠近法。

ぼくの旅の成果については「パレオマニア」という本を見てください。

池澤　夏樹

作家・詩人

1945年帯広市生まれ。詩集に「塩の道」。1988年、小説「スティル・ライフ」で芥川賞を受賞。2011年「池澤夏樹＝個人編集　世界文学全集」全30巻を編集「日本文学全集」30巻を刊行中。2014年に北海道文学館の館長に就任。札幌市在住。

法人設立40周年を迎えて　思い出すこと、願うこと

一万人の会員

(一社) 北海道美術館協力会　副会長・理事　和田　壬三

札幌にも道立近代美術館が出来る。国内外の多くの美術作品が見られるという夢のような話を、親友の画家・木路毛五郎氏から聞いた時の喜びは、今でも忘れられません。

美術館協力会を作りたい。会員を一万人集めれば、経費を除いても毎年5,000万円ほどの基金が出来るので、2年毎に一億円ほどの絵画購入資金が出来る。500万の北海道の人口の500分の1だから、遠からず集まるよ。という木路さんのお話を信じて当面の活動資金を提供しました。

私も北海道の躍進を信じていたし、木路さんも自信に溢れていました。莫大な交通費を掛けて、東京まで出向き、しかも東京にいる頃味わったような長蛇の列に悩まされながら鑑賞する不自由さから脱却できるのだから、年間1万円の会費などは、たかが知れていると思いました。

今でも、日ハム戦などを見るために何万人もの方がいることなどを考えると、その金の一部でも会費に充てて貰えれば直ぐ目標が達成できるので、美術館に対して同じようなファンが生まれれば必ずしも無謀なこととは思えないのですが、現実の壁に戸惑っています。

美術愛好家を増やし、道立美術館の常設展の人気が高まり、貸館に常時充実した特別展が開催されるようになれば、一万人の会員増強も夢ではないと思うのですが、既に40年も経ってしまいました。

緊急の課題である当会の財務を立て直すためには、他の方法も積極的に取り入れなければならないと思うようになりました。

協力会のホームページを充実させて、近美や三岸、その他の道立美術館の展示作品の解説などを画像付きで常時解説する各館の案内とリンクさせて、アクセス数を増やし広告収入を得るとか、現在発行している「アルテピア」を会員だけではなく、公共の施設や医院、書店、大型商業施設、など多くの方や場所に配布するなどして発行部数を増して、広告収入を増加させる等の工夫をしなければならないと思います。

しかし現実には、超有名な作品の寄贈を受けるとか、民間人が貯蔵している希少な作品を見出して近代美術館に貸し出して貰うとか何とか近代美術館に人気が集まるような事件が起こらないかと期待するしかないという心境です。

振り返って

(一社) 北海道美術館協力会　理事　名畑　節子

30数年前、子離れができ、家庭の主婦が社会参加でも、との軽い気持で誘われるままに、活動の仲間入りをしました。しかし、「婦人美術講座」を終了し、「ボランティア証」を手にした時、美術館を愛し、理解され開かれたものにすると同時に「名画を贈る」という熱い心で一生懸命に活動している先輩達の仲間になりたいという気持が強くなり、今に到っています。この熱い心が後に「マリー・ローランサン」の作品を2点寄贈することができ、協力会とボランティアの一致した力の結果だと感動しました。当時、私は売店を担当しておりました。2ヶ所ある売店の特徴を出し、来館者が立ち寄りたくなる様な店にするにはどうするか、悩み、話し合いの末、西側売店を、土産物、記念となる物、東側を図録、書籍、葉書類などと位置づけ、様子をみました。商品に特徴がなくてはと思い、何とかして「オリジナル品」を作ろうと、試行錯誤をしていたところ、美術館の庭には沢山の木があり、美しい花を咲かせている。これを利用しようと思い立ち「美術館の木々の花カレンダー」を作る計画をたて、ボタニカル専門の先生に相談し、作製に係りましたが、制作費、印刷会社その他、多くの問題を抱えながらも、理事会のGOサインが出た時は、身が引き締る思いでした。発想から2年、「カレンダー」、「カード」が完成し大好評でホッとしました。販売には他館のご協力も戴きました。

協力会設立40年、この間には大勢の方々が会員として携わってこられました。会員減少の今、もう一度振り向いて頂いて魅力ある美術館、協力会にするにはどんな方法があるか知恵を出し合っていけたらと思います。前庭に大きな銀杏の木があります。美しい姿で春夏秋冬、私達をじっと見守っていてくれるように思えてなりません。当会もあの木のように凛として堂々と大きくなるようにと願っています。

法人設立40周年を迎えて　思い出すこと、願うこと

北海道美術館協力会に感謝!!

解説部　田原　典子

協力会設立40周年記念おめでとうございます。

昭和52年3月準備委員会発足、4月総会、7月に、独自の雪国的造形の北海道立近代美術館完成。後に、10年間近美館長をされ、当時、山種美術館学芸部長をされていた倉田公裕氏と、同学芸員で、後の近美準備室主任学芸部長の武田厚氏は、米国の美術館を視察、後援組織とボランティアの実態をくわしく調査。

また、アメリカ文化センターの谷貴子氏は、長年、実態を見聞してきた米国婦人地域活動から、ボランティアの解説サービスを考えた。協力会理事の木路毛五郎氏を加え、共に米国の美術館後援ボランティア組織を、新たに北海道でどう生かすか調査、研究、議論を重ねた。

近美開館と同時に15人の売店部、1年遅れで、養成講座を終えた解説部18名が活動を開始。昭和54年、協力会法人化、8月には社団法人美術館協力会が始動した。

昭和63年9月には、マリー・ローランサンの作品を2点購入し近美に寄贈、10月に一般公開された。

平成2年には、ARSコーナー、資料整理部が活動開始。平成6年に、事業部、研修部、特別活動部、広報部を加えた7部体制になった。

平成8年4月に、協力会愛称が「アルテピア」に決定。6月事務局移転、ボランティア室が設置、7部門で活用することに。

私は5期生で、理事の谷氏と同期です。作品解説31年、ARS4年と、35年間活動してきました。長く続けられたのは協力会のおかげでした。高い美術文化教育、心の豊かさを下さった協力会の40年間の活動に、深い感謝を捧げます。

ボランティア徒然記

特別活動部　大橋　渉司

アルテピアが設立40周年を迎えました。多くの方々の献身的な努力の賜と思います。私もその端くれに加わってから早や10年になります。入部の動機は知人の勧めでしたが訪欧時、美術館で子供達が絵画の前に座り込み説明を受けている姿が目に残り、美術館ボランティアを志望する切っ掛けになりました。

入部してから間もなく、美術館ロビーで特活部活動の一つワークショップが開催されました。工作の手伝いをしていた所、母親と小学校低学年とおぼしき一寸難しそうな雰囲気の男の子が訪れました。一見して母親の子供に対する強い気遣いを感じ、作品制作は一段階省く易しい方法を勧めました。男の子は母親の心配そうな顔の下でなんとか作品を仕上げたので、「上手にできたね」と言った所、嬉しそうな顔、そして母親の優しい笑顔。その場所を離れ他の参加者をフォローしていると、先程の母子が来て丁寧に礼を言って帰りました。まさにボランティア活動の楽しさを味わう一時です。

もう一つの活動「美術への誘い」での作家、作品紹介でも参加者の方からの「楽しかった」の一言は活動意義を感じる瞬間です。元文化庁長官の河合隼雄が文化ボランティアは「少し肩の力を抜いて好きな事をやりましょう」と言っています。アルテピアの存在意義をもっとPRして会員を、そして募集期間を長くとり制約を緩やかにして、ボランティア仲間を、それぞれ増やしたいものです。

40周年を記念して開催された「親子アートクラブ」には、親子53名が参加され、とても楽しそうに作品づくりをしていただきました。

40年の曲がり角

資料部　佐野　美佐子

最近、美術館のために活動しているという感じがしない。理由は二つあるように思われる。組織の運営資金に不安があること。もうひとつは運営側（理事・事務局）と活動側（ボランティア）に乖離が生じていること。各部の現状は、ボランティア数の減少で、従来からの活動を継続することに手一杯の状態である。

設立時、「協力会」は全国にある美術館「友の会」とは違い、道立であるがゆえに館ができないこと（作品寄贈、駐車場や売店経営等）を、アメリカ式に館に対して主体的サポートする組織として発足した。しかし、近年は館へ負担をかける事業もあり、道民への美術振興どころか、40年も経つのに道民からの認知度は低いようである。活動員の中でさえもこの関係性を理解している方がどれくらいいるかは疑問で、対外的な説明が難しく、部員勧誘の際は「お金を払ってボランティアしているのか」と言われることも少なくない。

創立からの年月が経つと、知らず知らずのうちに利用者よりも自分の組織を大切にしていたり、自己犠牲を避けたり、責任を自分以外のところに見つけようとしがちである。と、先達の方が言っておられた。美術館のボランティアとは本来どのような姿が望ましいのか、今一度考えてみる時期に来ているのだろう。

資金（会員）不足であるが故、組織を周知させることに躍起となりがちだが、美術館を支えるという原点を忘れてはいけない。現況に即し、身の丈に合った活動をすることが息の長い貢献につながると思うのだが。

祝40周年　私たちはアルテピアを応援しています。

（順不同）

株式会社 アミノアップ化学
代表取締役会長
小砂憲一
〒〇〇四－〇八二九
札幌市清田区真栄三六三－三二
TEL（〇一一）八八九－二二七七

株式会社 北洋銀行
〒〇六〇－八六六一
札幌市中央区大通西三丁目七番地
TEL（〇一一）二六一－一三一一

中島公園と豊平川に囲まれた
四季が薫るホテル
公立学校共済組合札幌宿泊所
ホテルライフォート札幌
〒〇六四－〇八一〇
札幌市中央区南十条西一丁目
【代表】（〇一一）五二一－五二一一
https://hotel-lifort-sapporo.jp/

中西印刷株式会社
代表取締役
林下英二
〒〇〇七－〇八二二
札幌市東区東雁来三条一丁目一番三四号
TEL（〇一一）七八一－七五〇一

北洋ビル管理株式会社
代表取締役社長
岡田知己
〒〇六二－〇〇〇三
札幌市西区山の手三条七丁目一番五号
TEL（〇一一）六四一－四一四四

(株)道新文化センター
〒〇六〇－八七一一
札幌市中央区大通西三丁目六
道新ビル大通館七階
TEL（〇一一）二四一－〇一一三

株式会社三好商会
代表取締役
三好康裕
〒〇六〇－〇〇四二
札幌市中央区大通西十八丁目
TEL（〇一一）六三一－七一一一

日本通運株式会社 札幌西支店
支店長
蝋山良浩
〒〇六〇－〇〇一〇
札幌市中央区北十条西十六丁目一－二
TEL（〇一一）六三一－一一四五

北海道旅客鉄道株式会社
法人旅行札幌支店　支店長
石崎雅史
〒〇六〇－〇〇〇四
札幌市中央区北四条西四丁目
TEL（〇一一）二二三－五七四〇

岩橋印刷株式会社
代表取締役社長
熊田賢治
〒〇六二－八五八〇
札幌市西区西町南十八丁目一番三四号
TEL（〇一一）六六九－二五一〇

社会医療法人康和会 札幌しらかば台病院
理事長
加藤康夫
〒〇六二－〇〇五二
札幌市豊平区月寒東二条十八丁目七番二六号
TEL（〇一一）八五二－八八六六

社会医療法人社団三草会 クラーク病院
副理事長・院長
木村敏信
〒〇六五－〇〇四二
札幌市東区本町二条四丁目八－二〇
TEL（〇一一）七八二－六一六〇

公益財団法人 北海道文化財団
理事長
磯田憲一
〒〇六〇　〇〇四二
札幌市中央区大通西五丁目一一
大五ビル三階
TEL（〇一一）二七二－〇五〇一

北海道立函館美術館
館長
堤邦雄
〒〇四〇－〇〇〇一
函館市五稜郭町三七番六号
TEL（〇一三八）五六－六三一一

全道美術協会
事務局長
田崎謙一
〒〇六九－〇八三一
江別市野幌若葉町三十三番七号
TEL（〇一一）三八三－五九二五

北海道美術協会（道展）
事務局長
澤田範明
〒〇〇三－〇〇一一
札幌市白石区中央一条四丁目三－二四
TEL（〇一一）八四一－〇五三五

祝40周年　私たちはアルテピアを応援しています。

（順不同）

新北海道美術協会
事務局長
後藤和司
〒〇六二－〇〇三四
札幌市豊平区西岡四条八丁目一二－一〇
TEL/FAX（〇一一）八五五－五七八二

公益財団法人北海道文学館（北海道立文学館指定管理者）
理事長
工藤正廣
〒〇六四－〇九三二
札幌市中央区中島公園一－四
TEL（〇一一）五一一－七六五五

一般財団法人北海道公立学校教職員互助会
理事長
岸豊
〒〇六〇－八五六〇
札幌市中央区北一条西六丁目二番地
損保ジャパン日本興亜札幌ビル五階
TEL（〇一一）二七一－五二二五

株式会社北海道教育互助センター
代表取締役
井上歳郎
〒〇六〇－〇〇〇一
札幌市中央区北一条西六丁目二番地
損保ジャパン日本興亜札幌ビル五階
TEL（〇一一）二八一－〇〇三七

公益財団法人北海道生涯学習協会
会長
宇田川洋
〒〇六〇－〇〇〇二
札幌市中央区北二条西七丁目
かでる二・七ビル　九階
TEL（〇一一）二八一－六六六一

一般財団法人北海道文化財保護協会
理事長
舟山廣治
〒〇六〇－〇〇〇二
札幌市中央区北二条西七丁目
かでる二・七ビル　九階
TEL（〇一一）二七一－四二二〇

公益財団法人北海道科学文化協会
理事長
木村俊昭
〒〇六〇－〇〇〇一
札幌市中央区北一条西七丁目
あおいビル
TEL（〇一一）二六一－六九七七

公益財団法人北海道学校給食会
理事長
千葉俊文
〒〇六三－〇八四九
札幌市西区八軒九条西十一丁目
一番五十五号
TEL（〇一一）六四一－二二六一

一般財団法人
道民活動振興センター
〒〇六〇－〇〇〇二
札幌市中央区北二条西七丁目
TEL（〇一一）二〇四－五一〇〇

美術　新彩堂
代表
新田一博
〒〇六〇－〇〇〇三
札幌市中央区北三条西十八丁目
新田ビル一階
TEL（〇一一）六一二－〇〇四一

グラススタジオ
お茶の水
〒〇六九－〇三八四
岩見沢市御茶の水町三六三－八
TEL（〇一二六）二六－四四六一

㈱クリエーション工房林
代表取締役
林正美
〒〇六四－〇八二〇
札幌市中央区大通西二八丁目
一番二五号
TEL（〇一一）六四四－七一九一

一般財団法人スウェーデン交流センター
理事長
村松宏一
〒〇六一－三七七七
北海道石狩郡当別町スウェーデンヒルズ
二三二九番地二五
TEL（〇一三三）二六－二三六〇

株式会社ドーレン
〒〇六三－〇〇〇三
札幌市西区山の手三条六丁目四－一
TEL（〇一一）六一六－一八五五

和田・下津谷法律事務所
弁護士　**和田壬三**
弁護士　**下津谷圭司**
〒〇六〇－〇〇〇三
札幌市中央区北三条西七丁目
緑苑ビル五一五号
TEL（〇一一）二八一－〇九〇九

札幌日産自動車㈱
代表取締役社長
杉本亙
〒〇六〇－八五二三
札幌市中央区大通西十七丁目一－二三
TEL（〇一一）六一三－一一二三

祝40周年　私たちはアルテピアを応援しています。

（順不同）

鷹野正義法律事務所
弁護士
鷹野正義
〒〇六〇―〇〇〇一
札幌市中央区北一条西十六丁目一番地二七
北海道たばこ会館五階
TEL（〇一一）六一二―八四八一

北海道立帯広美術館
ボランティアしらかばの会会長
大河原茂美
〒〇八〇―〇八四六
帯広市緑ヶ丘二番地
TEL（〇一五五）二二―六九六三

札幌彫刻美術館友の会
〒〇六四―〇九四一
札幌市中央区旭ヶ丘五丁目六番六一号
TEL（〇一一）五二一―三五四〇

余白の会
（北海道立近代美術館ボランティアOB・OGの会）
代表
関川節子
〒〇〇一―〇〇四五
札幌市北区麻生町二丁目九―十五
TEL（〇一一）五八三―〇二三四（若林）

株式会社アド・ダイセン
代表取締役社長
大嶋禎
〒五五〇―〇〇一一
大阪市西区阿波座一丁目三番十五号
JEI西本町ビル七階
TEL（〇六）六五三四―二二一一

高層ビルブランコ清掃／ハウスクリーニング
NK WASH
代表
廣田亮
〒〇〇二―〇八五九
札幌市北区屯田九条一丁目一三―一七
TEL（〇一一）七七四―四四〇二

奥井理（みがく）ギャラリー
〒〇六四―〇九四一
札幌市中央区旭ヶ丘五丁目六―六一
TEL（〇一一）五二一―三五四〇

フラワーコミュニケーション有限会社　DESK：K
〒〇六〇―〇〇〇二
札幌市中央区北二条西十八丁目一番十三号
気象台北海道立美術館近く北向
TEL（〇一一）六一二―八六六五

皆様のご支援ご協力に心より感謝申し上げます。
今後とも本道の美術文化の振興発展に努めて参ります。

一般社団法人 北海道美術館協力会

会長	吉野次郎
副会長	相馬秋夫
副会長	小林敬明
副会長	和田壬三
専務理事	藤井勇吉
理事	石黒勇治
理事	加藤康夫
理事	金井英明
理事	腰塚清一
理事	小砂憲一
理事	菅伸之
理事	杉本亙
理事	戸井敏夫
理事	長峯慰子
理事	名畑節子
理事	藤井正治
理事	堀利幸
理事	松平英明
監事	木村俊昭
監事	黒田幸男
事務局長	武田和弘
事業部長	木村壽賀子
広報部長	田辺恭子
売店部長	宮崎美代子
解説部長	柿崎三津子
資料部長	佐野美佐子
研修部長	佐藤哲子
特別活動部長	吉江志起子

設立40周年特別キャンペーン実施中！

北海道美術館協力会（愛称アルテピア）は、多くの皆様方のご支援ご協力により、今年度設立40周年を迎えることができました。

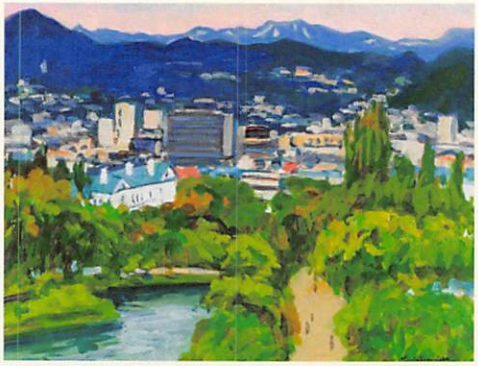
当協力会では、40周年の感謝を込めて、平成30年3月31日まで会員募集特別キャンペーンを行っておりますので、この機会に是非ご入会下さい。詳細は事務局にお尋ね下さい。

協力会からキンビへ
寄贈作品の紹介

1《フジタの肖像》

2《三人の娘》

3《犬と三人の乙女》



4《新緑の札幌》

編集だより

■特別号の編集で協力会40年のあゆみを振り返り、歴史の重みを感じました。これからも人々が美術館を見近に感じられるような活動をめざしたいと思いました。(A)

■協力会40年の歴史は、ここ北海道の美術文化に大きく寄与したものであります。いま、改めて先輩の努力に敬意を払いつつ、特別号の編集をさせていただきました。(K)

■協力会が産声をあげて40年。その年は、日航機のハイジャック、有珠山32年ぶりの噴火、高倉健の「黄色いハンカチ」がヒット、池田満寿夫の「エーゲ海に捧ぐ」がベストセラーになりました。協力会は多くの方の努力で多様な事業が展開されています。40年を契機に更なる飛躍を。(S)

■手さぐりで始まった「特別号」ですが、日を追うごとに形を成し、この度、発行することができました。お忙しい中、原稿をお寄せくださった方々、取材に協力くださった方々、ありがとうございました。心からお礼を申し上げます。(M)

画像説明

1　アメディオ・モディリアーニ《フジタの肖像》　1919年
　　鉛筆・紙　縦48.5横20.0cm　寄贈年2010年

2　マリー・ローランサン《三人の娘》　1988年
　　油彩・キャンバス　縦61.0横49.8cm　寄贈年1988年

3　マリー・ローランサン《犬と三人の乙女》　1930～40年
　　水彩・紙　縦27.5横37.5cm　寄贈年　1988年

4　松島正幸《新緑の札幌》　1981年
　　油彩・キャンバス　縦72.5横91.0cm　寄贈年2010年

＊他に
藤田嗣治《家族の肖像》　1954年
油彩・ボード　縦17.5横12.5cm　寄贈年2012年
著作権保護期間中のため画像は割愛しました

発行に際し「伊藤組100年記念基金」から助成をいただいております。